岡崎市美博ニュース
【アルカディア】

Arcadia

OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS

VOL.21

エッセイ
美を破る―今井俊満とアンフォルメル

エッセイ
マン・レイとマネキン
―1920'S-1930'Sパリにおけるマネキンとシュルレアリムス

エッセイ
「大樹寺道」「信光明寺道」道標

コラム
源内展日記

ペシャージュ（桃／風景）　1966/1972
©Man Ray Trust/ADAGP, Paris & JVACS, Tokyo, 2004

OKAZAKI MINDSCAPE MUSEUM
岡崎市美術博物館

ESSAY

「美を破る」—今井俊満とアンフォルメル

館長　芳賀　徹

今井俊満《東方の光》

昨年夏から今年の初夏にかけて、画家今井俊満の作品をかなりの数、まとめて見る機会がつづいた。今井は2年前、2002年の雛祭りの日に、3年余りの癌との格闘の後に満73歳で亡くなったから（1928〜2002）、その追悼の意味もあったのだろうか。1955年のパリ留学以来、半世紀近くもっとも親しくつきあってきた友人の一人としては、まことに嬉しい展覧会の数々であった。

一つは、昨2003年の6月14日から7月6日まで、大阪市立近代美術館準備室のコレクション展として大阪のATCミュージアムで開かれた「絵画の冒険（アヴァンチュール）—今井俊満と戦後美術の歩み」という展覧会である。今井は京都生まれだが、父親の仕事の関係で幼少年時代の大半を大阪の船場で過したという因縁があって、生前に、初期から晩年までの180点に近い作品をこの美術館に寄附していた。そのなかの約30点の作品が、彼の日欧米の同時代・同志向の画家たちの作品と並べて、はじめてまとまって展示されたのである。

私は会期末に近い暑い一日、京都からはずいぶん遠いこのATCミュージアムというのをはじめて訪ねた。行った甲斐があった。私も写真版でしか知らなかったパリ時代最初期の『磔刑』（1954）のピカソぶりから始まって、一番なじみの深いアンフォルメル（非定形）の重厚華麗なマチエールの渦巻きや炸裂をへて、後年の「花鳥風月」「飛花落葉」シリーズの日本琳派への回帰、そして最晩年のアクリルの男女群像『パラパラ』（2001）にいたるまで——自称他称サムライ・イマイの勇猛果敢な冒険と転戦の一生を、ふたたび目のあたりにするかのような思いであった。

癌病棟の今井と電話で話しあったりした以上に、旧友に直接に再会しているような感じで嬉しかったのである。私が過去半世紀、この画家を信用し、面白いと思い、陰に陽に声援しつづけてきたのは、間違いではなかったと再確認できたのも誇らしかった。今井は、この展覧会に同時陳列されたアンフォルメルの先達や仲間たち、フォートリエやタピエスや吉原治良やその「具体」グループの作家たちとくらべても、いささかも遜色がなく、彼らの誰にも負けぬほど自由で大膽な自己の心身の表現を試みつづけたことがよくわかったからである。

二つ目は、つい最近、今年の4月9日から5月30日まで、倉敷の大原美術館で催された「パリ—日本　1950年代——青春は不定形」というしゃれた題名の展覧会だった。ここにも、今井は同時代のアンフォルメルの作家たち15名と並べて、大原所蔵の作品が大小6点展示されていた。前理事長大原総一郎氏は1950年の半ばからすでに、アンフォルメルと呼ばれた欧米の抽象表現主義の画家たちに注目していて、ジャクソン・ポロックやサム・フランシスなどのアメリカ勢をはじめ、今回展示されたフォートリエ、ヴォルス、デュビュッフェ、アペル、タピエス、マチウ、リオペル、カポグロッシなどヨーロッパ側の作品をもつぎつぎに購入していたのである。堂本尚郎や元永定正、白髪一雄などの「具体」の画家についてもそうだが、今井についてはとくに、大原はその作品を正式に蒐集した日本で最初の美術館だったのではなかろうか。

1957年秋、今井とほとんど一緒にフランス留学から帰国してまもないころ、私はよく今井が「大原（総一郎）さんが絵を見に来てくれた」「大原さんが絵を買ってくれた」といかにも嬉

しげに語るのを聞いたことがあった。今井の渡仏2年目の作品『女と牛』（1953）は、まだキュビスムやピカソの影響を色濃く残しながらも、悪戦苦闘のうちに自分のフォルムをつかみかけている若者の力（りき）み具合と沈鬱な気分がそこによく出ている。1955年の『馬』は『女と牛』よりもさらに数歩、独自な抽象化を進めた黒と白の大作で、私はこれがパリのメゾン・デュ・ジャポンの4階の通路の壁に立てかけてあるのを朝な夕なに横目に見ては、いったいこの絵はなにを訴えようとしているのかと思いつづけていたものだった。今回あらためて眺めてみると、若い今井の世界への予覚が「不定形」となって流露する寸前、なお抽象的なフォルムのなかに満を持して押しこめられているのが感じられ、なかなか悪くはない作品と思われた。

展覧会のカタログによると、この『女と牛』『馬』の2点とも、大原総一郎氏が1958年に渡欧したとき、ふたたびパリに戻っていた画家から直接に購入したものだという。私はこの展覧会の会期中、倉敷に招かれて、現館長で私の小学校以来の友人の高階秀爾氏と、1950年代後半のパリでの私たちの共通の美術体験を思うさまに語りあう機会をも得た。

そして三つ目の今井俊満への再会は、私たちの岡崎美博で現行の収蔵品展「美を破る」での展示である。ここでも今井は、ミロやマックス・エルンストの作品のあとに、サム・フランシス、菅井汲、井上有一などと並べて3点陳列されている。来館者の眼にこのアンフォルメル作品群はどのように映っているのだろうか。

井上有一《母》

アンフォルメルとは、けっしてパリ画壇の一派の一時期の表現に限られるものではなかった。それは第二次大戦終結直後のころから、ヨーロッパ各国に、アメリカの東西両岸に、そして日本の大阪に、はじめのうちは相互になんの直接のかかわりもなく同時に発生した、一種実存主義的な、反人間中心主義的な、反幾何学的な、そしてそれらの意味で人間の精神活動を未知の暗い地平へと押しひろげてゆく、新しい世界像表象の運動だったのである。既成の「美を破る」ことによって、戦後世界にまったく別な美を提示してきた美術運動であった。

今井俊満の作品も、井上有一やサム・フランシスの作品も、いまなお人々を途惑わせ、途惑わせることによって人々のなかに新鮮な未知の感覚のめざめをよびおこす。20世紀末から21世紀初めにかけて、いまだにこのアンフォルメルをこえて新しい世界認識を示しえた美術の表現は生まれていない。そう思うのは、1950年代のパリでアンフォルメルによって美の摺り込みを受けた私の小さな偏見であろうか。いや、偏見であるはずはない、と、私は東京の自宅の壁にかけた今井のアルフォルメルの大作、1957年2月のパリ・スタドラー画廊での最初の個展の出品作『夜の讃歌』（1956）を、何千回目にじっと見なおすたびに思うのである。

サム・フランシス《MANBORNE》

EXHIBITION ESSAY

マン・レイとマネキン

―1920'S―1930'Sパリにおけるマネキンとシュルレアリスム

学芸員　千葉真智子

図1　左からドミンゲス、レオ・マレ、マルセル・ジャンのマネキン

1966年、マン・レイは偶然発見した昔のネガをもとに一冊の写真集『マネキン人形たち』を出版している。そこに写るのは、様々に手を加えられた15体のマネキンで、撮影は、1938年。舞台は、パリのボザール画廊で開かれた「シュルレアリスム国際展」のメイン会場に続く通路である。【図1】

このときマネキンを手がけたのは、アルプ（ネガが失われたのか、彼のマネキンのみ写真集に登場していない）、エスピノーザ、ソニア・モッセ、ドミンゲス、タンギー、マルセル・ジャン、マッソン、モーリス・アンリ、ダリ、デュシャン、エルンスト、セリグマン、ミロ、レオ・マレ、パーレン、

図2　マン・レイのマネキン（上部に「真珠通り」のプレートを掲げる）

そして、マン・レイ。彼の回想録にも、当時の様子を窺わせる記述が残っている。「裸のマネキン16体が借り入れられ、出品する画家めいめいに一体が与えられて、好きなように衣裳を着せたり、手を加えることになった。わたしたちはおたがいにしのぎを削りあった――かぶり物には鳥籠、雄鶏の頭部など、衣裳にはヴェール、詰め物、台所用品など、といった具合だった。わたしのは裸のままにして、顔にはガラス玉の涙、髪にはガラスのシャボン玉をくっつけた。」（『マン・レイ自伝―セルフ・ポートレイト』より）【図2】

「マネキン」と言えば、シュルレアリスム運動の指導者ブルトンは、1924年の『シュルレアリスム宣言』のなかで、既に「現代風のマネキン」を人間の感受性を揺り動かし、文学や芸術を実りある豊かなものにする力＝「驚異」の象徴として取り上げているし、デ・キリコによる無表情なマネキンやベルメールの『人形の遊び』に登場する女性性を露にしたマネキンなど、他のシュルレアリストたちの作品においても重要なモティーフとなっていた。【図3】

では、マン・レイを、またシュルレアリストたちを魅了した「マネキン」とは何だったのか？その謎を解く鍵は、彼らが活躍した1920年代・30年代当時のパリにある。

19世紀末以来、「芸術大国」フランスは、「芸術後進国」ドイツの「大量機械生産品」に対する羨望とライバル心から、反対に「豪華装飾芸術品」をフランスらしさの象徴と謳い、1902年には、その代表として「オートクチュール（高級婦人服）」の「芸術的価値」を「著作権」によって保証――対照的に新たな産

図3　ハンス・ベルメール「人形の遊び」（1938）より

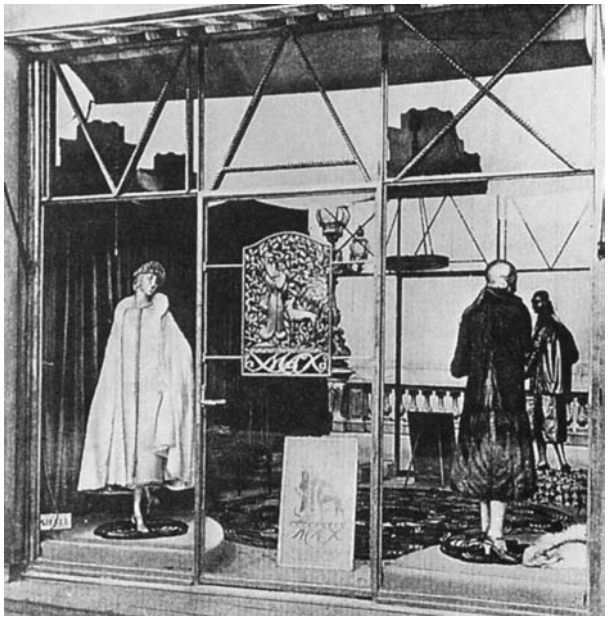


図4　マックス毛皮店のショーウィンドウ

業製品の「技術的価値」を保証したのが特許である――するまでになっていた。そこで、芸術品であるオートクチュールをそれ相応に見せるために欠かせない存在となったのが「マネキン」である。ところが興味深いことに、シュルレアリストたちが登場する1920年頃になると、その状況に、ある変化が訪れるのである。

そこで、1920年代パリの一大イベント、「現代産業装飾芸術国際博覧会(通称アール・デコ展)」に目を向けてみよう。1911年に開催案が持ち上がり、その後、第一次世界大戦による延期を経てようやく1925年に実現されたアール・デコ展には、何より「芸術都市・モード都市パリ」の復興と成熟を国外に強くアピールすることが期待されていた。そして、この「フランスらしさ」への固執の結果、会場では、「大量機械製品」が影を潜め――以前の万国博覧会では、この「機械」こそ、進歩と近代性の証であった――その得意とする華やかな装飾芸術品が賑わいを与えることになったのだが、この会場構成のうちに、新たな「マネキン」の姿が浮かび上がるのである。

さて、ここで今日私たちが目にする百貨店や高級ショップの外観を思い出して欲しい。すると「ショーウィンドウ」という外部に開かれた窓と、効果的な演出を施された商品たちが、通行人を誘惑する様が直ちに思い浮かぶだろう。アール・デコ展における演出とは、まさにその先駆で、なかでも会場中心のアレクサンドル3世橋上には、「ショーウィンドウ」に覆われたブティック約50店舗から成る長大な「ブティック通り」がお目見えし、マネキンたちが一大スペクタクルを演じていたのである【図4・5】。それはもはや、商品の演出という規模を越え、通りに表情を与え、通りを性格づけるものだったと言えるだろう。

そこでさらに、建築部門・彫刻部門・家具調度部門など全部で37あった博覧会出品部門のうち、ショーウィンドウとマネキンが、「通りの芸術(art de la rue)」部門に属し、さらにこの「通りの芸術」部門が、大戦後の首都パリを活性化するという、最も今日的な必要によって開設された博覧会新部門であったと言えば、1920年代以降の「マネキン」が、「通り」という都市規模において重要な役割を果たしたことは疑い得ない。魅惑的な都市の表情は、文字通り、魅惑的なマネキンの表情によって作られようとしていた。第一次大戦後のパリが、今日「狂乱の時代」と称されるのも、このように女性化された都市の活況故のことだったのである。

以上のようにマネキンとパリの通りの関係を辿ってきたところで、最後にマン・レイおよびシュルレアリストへと話を戻そう。

1921年のパリ移住後、ポール・ポワレのコレクション撮影を行うなどモード写真の業界でも華々しく活躍していたマン・レイ。何と彼は、モード雑誌の依頼により、アール・デコ展の会場を訪れると、オートクチュールを着飾るマネキンの姿を撮影していたのであり、さらに、このときのマネキン写真は、『シュルレアリスム革命誌』の表紙に転用されることになるのである。

こうしてマン・レイを介してアール・デコ展、マネキン、シュルレアリスムが一つの線で結ばれた。

1938年のシュルレアリスム国際展とは、まさにこのアール・デコ展で顕者になった「都市とマネキン」の関係が、シュルレアリストたちの眼を通して、最も魅惑的に体現された場であった。そこでは、マネキンたちが、多くの場合裸のまま見世物として会場通路＝通りに置かれ、さらに象徴的なことには、各々の頭上に、実在のあるいは架空の「通りの名」を記した青いプレートが掲げられたのである。

シュルレアリスム運動において、パリという都市空間――全てが均質なユートピア的都市ではなく、混沌と長い時間の堆積から成る都市――は、「超現実」に通じる魅惑の対象であったが、そのような都市の「遊歩者」シュルレアリストたちにとって、通りに姿を現すマネキンたちは、魅惑の美しき娼婦に他ならなかったのだろう。「マネキン」とは、シュルレアリスムが、大戦後の「パリ」という特異な時代と場を舞台にした運動であったその証明なのである。

図5　アレクサンドル3世橋上「ブティック通り」

EXHIBITION ESSAY

「大樹寺道」「信光明寺道」道標

学芸員　堀江　登志実

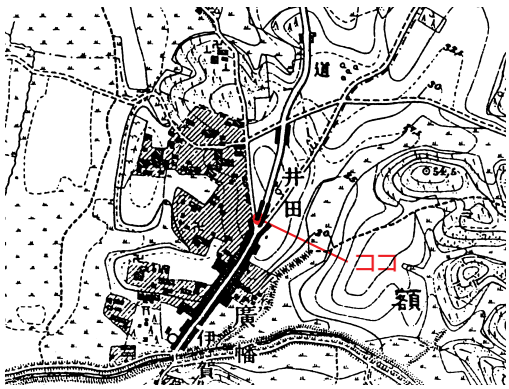
当館では9月11日から10月17日まで「大樹寺と信光明寺―寺の経営と民衆」展を開催予定ですが、ここでは同展に関係して、市内に残る大樹寺と信光明寺への案内道標2本を紹介しましょう。

まず、1点は井田町の泉龍寺に現存する高さ121.5cmの石柱で、四面に「左、大樹寺道」「岩津信光明寺・ばせう天神・信州せん光寺、中道」「右、瀧山寺道」「安永九庚子八月建之」と、それぞれ彫られています。三叉の分岐点に建っていたようで、左へゆくと大樹寺、真中の道を行けば信光明寺・芭蕉天神・信州善光寺、右へゆくと瀧山寺、を案内していたもので、安永9年（1780）に建立されたことが知られます。

もう1点は井田町の個人宅に現存するもので、高さ182cm余もある立派な石柱です。四面には、先の道標と同様に「左、大樹寺道」「中、岩津信光明寺・信州善光寺道」「右、瀧山寺道」「嘉永元年戊申三月立之、江戸宇田川道春書」と、彫られています。伝え聞くところによると、この道標は先の安永9年道標と同じところに立てられていたものといいます。

二つの道標が立てられていた場所は井田町のどこだったのでしょうか。岡崎の中心街から北上する県道岡崎足助線が伊賀町交差点を過ぎると、上り坂になりますが、その途中の井田観音のバス停で細い道が左右に分れており、この分岐点が道標の旧位置です。この分岐点は江戸時代以来のもので、明治24年の地形図には、この三叉状に分れる道の形状がよく表現されています。

大樹寺、信光明寺とも、松平氏によって建立され、江戸時代には将軍家徳川氏により保護を受けた由緒ある寺院です。こうした寺院への道案内碑が建立されることは、江戸時代後期に始まる庶民の旅熱に対応するものとみられます。嘉永元年（1848）道標がひときわ大きくなるのも、そうした情況を示すものでしょう。江戸時代の半ばから徳川氏の由緒ある寺院でも、幕府財政難から修復のための援助が得られなくなり、修復資金獲得のために様々な活動を行なうようになります。信光明寺の芭蕉天神による庶民対象の活動もその一つです。本稿で紹介した道標も、武家のみならず庶民をも対象とした両寺の活動に対応するものともいえましょう。



明治24年地形図

源内展日記

平賀源内展も5月9日で無事終了。展示品の数々も一部は返却したものの、22日に福岡市博物館へと旅立っていきました。飛行機なら1時間半ぐらいでしょうが、国内では、安全性を第一に考え、美術品専用車で広島に1泊の2日がかりで九州にたどりつきます。

源内展では一般の方々にまじり、関係者や専門の方々にも来館いただきました。

◇4月3日、オープニングには、わざわざ源内生誕地の四国さぬき市志度から、平賀源内先生顕彰会副会長砂山長三郎氏に来館いただきました。顕彰会というとただ単に人物の業績を顕彰するのみのところが多いのですが、源内の会は、人柄にはじまり、源内のもっていた幅広い視野と強い好奇心、人と人とを繋ぐネットワークの精神を学び受け継いでいこうとするもので、分野にとらわれないユニークな活動が続けられています。

◇4月17日の芳賀館長講演会には、平賀家の現在の当主、源内から数えて7代目の平賀一善氏も駆けつけていただきました。

芳賀館長と藤田氏

源内が家を譲った妹里与といとこの権太夫の子孫です。直接の血縁は切れているそうですが、何処となくその面持ちは源内のイメージに重なって見えます。展覧会場をご覧の平賀氏を探すのに、源内にそっくりな人と指示したほどです。一方、その源内の重さ故、家を支えていくにも大変なご苦労があることもうかがうことができました。

◇4月20日、大分在住の中根忠之氏来館。岡崎藩5万石本多家（忠勝系）の家老中根家の現在のご当主です。美術博物館で発行する『中根家文書』下巻に向けての来訪です。先々代が膨大な文書の整理をされ、氏もこれを受け継ぎ文書の解読にあたられています。出版担当で古文書一途の堀江学芸員と岡崎藩の藩政改革談義に花を咲かせていかれました。

◇4月22日には仙台市博物館の内山淳一氏が前会場東北歴史博物館の佐藤琴さんと来館。岡崎会場のみで展示される谷文晁「犀図」を見るためです。内山さんは『江戸の好奇心　美術と科学の出会い』（講談社1996）で、江戸の絵画資料と博物学や医学などの科学とを結び付けて考察、江戸時代の人々の好奇心をみごとに今に甦らせた方です。文晁の細かな筆づかい、色使いから江戸の博物画に話が及び多くのことを教えていただきました。

◇4月25日、『平賀源内展』開催にあたっての最高殊勲者、香川県歴史博物館の藤田氏の講演会です。専門の蘭学と地元という地の利はあるものの、幅広い源内の好奇心に、互角にいどみ新たな発見（図録に「平賀源内の実像に近づくための新しい断片」と題して執筆）を重ね、図録の編集を一手に引き受けていくその熱血漢ぶりには頭が下がる重いでした。また、芳賀館長の無理難題をいやな顔一つせずに聞かれる大らかで優しい心遣いも見せてもらいました。

講演中の藤田氏

◇4月30日、平成8年開館以来、8年目で入館者50万人達成、記念式典を開催しました。岡崎市不吹町の神原勝弘さんが50万人目、奥様の登喜子さんと細川町の景山喜久子さんがその前後で、記念品と花束が柴田市長から手渡されました。美術館らしくないとの意見でくす球ではなく、風船割りとなりましたが、来館中の梅園小学校の子供達には受けていました。

柴田市長を間に神原夫妻と景山さん

公立美術館運営が様々な論議をかもし出している中で迎えたこの節目ですので、これから先を考え、身が引き締まる思いがしました。

◇　5月3日　エッセイにもある芳賀館長の竹馬の友、倉敷の大原美術館高階館長が来館されました。専門は西洋美術史とばかり思っていた高階先生から、源内や江戸文化についての知見を聞かせていただくことができ、美術史と比較文化と専門は異なるものの二人がお互いに刺激し合いその学問の幅を広げていることが感じられました。高階館長が就かれてから、より地元に密着した活動を展開されている大原美術館ですが、当館とも連携した活動ができればという思いが大きくなりました。

◇5月6日には日本テレビ『おもいっきりテレビ』の「きょうは何の日」コーナーの取材。5月17日を、秋田蘭画の小田野直武が若干31歳で亡くなった日として紹介する企画で、当館収蔵庫に仮置きの秋田県立近代美術館蔵「不忍池図」と桑名・照源寺「日本風景図」を撮影して行きました。丹念な下調査と取材、柔らかい人あたりの根津裕忠ディレクターの丁寧な番組制作に、主婦の人気番組の秘密を見る思いがしました。

（荒井信貴）

INFORMATION

■展覧会スケジュール

2004年7月17日（土）～9月5日（日）
マン・レイ展「私は謎だ。」

ニューヨーク・パリ・ハリウッドと国境を越え、また写真・油彩・素描・オブジェ・彫刻・映画とジャンルの境界を越えて活動したマン・レイ。本展では、ダダやシュルレアリスムといった前衛運動に関わりながらも、常に枠にとらわれることなく、軽やかに20世紀を駆け抜けた「謎の旅人」マン・レイの知られざる全貌に迫ります。

2004年9月11日（土）～10月17日（日）
大樹寺と信光明寺　―寺の経営と民衆―

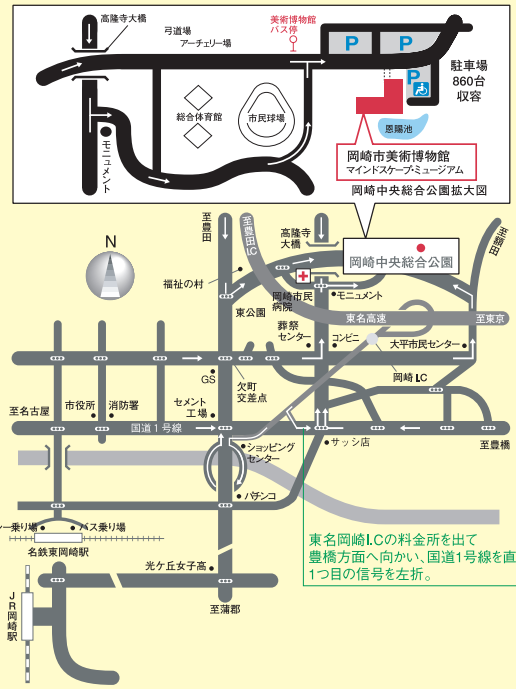
当館に寄託されている大樹寺と信光明寺資料から、宝物のほか、寺の経営、寺と民衆の関わりにも焦点をあてて資料を紹介します。両寺とも徳川将軍家から朱印状をもって寺領を安堵された朱印寺社ですが、江戸時代後期には寺の維持・修復のための取り組みが行なわれます。今回の展示では、こうした寺の経営をも視野に入れながら両寺の歴史と文化財を見直します。

2004年10月23日（土）～11月28日（日）
日本のシュールでリアルな美　驚きの浮世絵

浮世絵は、日本人の美意識に江戸庶民の粋や遊び心のエッセンスをきかせて生まれた、世界的にも評価の高い芸術です。この展覧会は、浮世絵がもつ驚くべき奇想天外な表現から幻想性、そして究極の美的表現まで、その幅広い魅力を、知的好奇心に溢れた様々な視点から展開します。今までの浮世絵というイメージが一新されることでしょう。

●開館時間／午前10時～午後7時（6月1日～9月30日）
午前10時～午後6時（10月1日～5月31日）
〈入館は閉館時間の30分前まで〉
●休　館　日／毎週月曜日（祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日）
年末年始（12月28日～1月3日）
※展示替えのため臨時休館することがあります。

◎公共交通機関／名鉄東岡崎駅バスのりば②より25分、（名鉄バス）「中央総合公園」行「美術博物館」下車徒歩3分
◎タ　ク　シ　ー／名鉄東岡崎駅から約15分
JR岡崎駅東口から約20分
◎自　家　用　車／東名高速道路・岡崎I.Cから約10分



OKAZAKI
CITY MUSEUM

【岡崎市美博ニュース／アルカディア】
●Arcadia　第21号　●2004年6月発行　●編集・発行　岡崎市美術博物館（マインドスケープ・ミュージアム）

岡崎市美術博物館
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内
TEL0564-28-5000（代表）
ホームページ　http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/ka111.htm

PRINTED WITH SOY INK
R100 本紙に古紙配合率100%再生紙を使用しています。